

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 25 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530954

研究課題名(和文) ラテン語educareとeducereに関する教育概念史研究

研究課題名(英文) History of Ideas of Latin Verb 'educare' and 'educere'

## 研究代表者

白水 浩信 (SHIROZU, Hironobu)

北海道大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：90322198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はラテン語educareの用例を整理し、語義を確定するものである。用例検索にあたってはトイブナー古典叢書を活用した。古典ラテン語作品におけるeducareの用例は500件以上確認され、特に農業論とラテン語文法書において頻出する。コルメッラ『農業論』では家畜の飼育という文脈で多く用いられ、educareが養い育てることを意味していたことを示している。また古代末のラテン語文法書、ノニウス・マルケッルス『学説集』は、educareは養い育てること、educereは外に連れ出すことという語義の違いを鮮明に認識しており、ウァローやウェルギリウス等の著名な作品を引証している興味深い事実が判明した。

研究成果の概要(英文)：This research project is building a database of citations of the Latin verb, educare and educere, which arranges authors, works, references and contexts. Bibliotheca Teubneriana Latina on line is utilized for the purpose. As a result, more than 500 quotations of educare could be found in the Latin Classics. A large number of them are mentioned in two kind of domains: agriculture and Latin grammar. In the text of Columella's De Re Rustica, educare means nurturing of domestic animals and fowls. In another text of Nonius Marcellus' De Compendiosa Doctorina, the difference between educare and educere is stressed, the former is nourishing and the latter is taking something out. It is interesting that Latin grammarians in the late antiquity cited diverse passages from Varro, Plautus, Vergil and so on.

研究分野：西洋教育史

キーワード：educare ラテン語 用例分析 用例データベース 教育概念史

### 1. 研究開始当初の背景

近年、「教育(education)」概念そのものを再措定しようとする動きがみられる。例えば『教育学研究』[第77巻第4号2010]では、「教育」概念の再検討」という特集が組まれたばかりで、その冒頭にある「教育を支える諸条件の変化を前に、変化にふりまわされることなくそれに対応するためには、「教育」の概念それ自体にたちもどって検討を行うことも必要」という課題提起はそれ自体、首肯すべきものがある。しかしこの特集号にあっても、概念史を踏まえた形での検討がほとんどなされていないのは惜まれる。「教育」概念そのものに立ち返って再検討しようとするならば、おのずと言葉の歴史を踏まえた概念分析がなされてしかるべきであり、そうでなければ百家争鳴するばかりの「教育」概念再定義は、言葉の歴史を喪失した空虚な「プラスチック・ワード」[U・ペルクゼン『プラスチック・ワード』2007]の戯れと化すおそれがある。

すでに大田堯や中内敏夫の先駆的指摘[大田堯『教育の探求』1973; 中内敏夫『新しい教育史』1987]をはじめ、「教育(education)」概念の歴史的系譜に関する研究の萌芽は存在したが、とりわけ寺崎弘昭による『ヨーロッパ教育関連語彙の系譜に関する基礎的研究』[平成13-15年度科研費研究成果報告書]によって、ラテン語 *educatio* にまで遡る教育概念史研究は飛躍的な進展を遂げた。ラテン語 *educatio* の用例を丹念に遡れば、それは、人間はもとより動物や植物さえ包含した、生きとし生けるものを養い育てる営み、養生として位置づくものである。このことは西洋教育概念史研究上、重要な達成として強調されて然るべきである。さらに本研究に先立って、西洋養生思想史研究の成果の一つとして、キケロとプラトンの作品をラテン語とギリシア語で比較対照することによって得られた知見、ラテン語 *educatio* はギリシア語 τροφή (栄養・養育) の系譜に連なる食を核とした生を養う営みとして理解しうる点を強調してきた。このことは、これまで何の疑いもなくギリシア語 παιδεία を「教育(education)」と翻訳し続けた教育学の通説を覆す論争的な仮説の提示として十分特筆に値する。

### 2. 研究の目的

西洋ラテン語文献を正面に据えた教育概念史研究はなおその緒についたばかりであり、さらに実証的研究が積み重ねられて、その精度を高めていかなければならないことは言うまでもない。特にラテン語 *educatio* の動詞にあたる *educare* の検討はほとんど手つかずの状態であり、*educatio* 同様、いつ、誰が、どの著作において、いかなる文脈で *educare* を用いたのか、このことを整理していく作業が不可欠である。この作業は語形変化がよく似た動詞 *educere* の用例と区別して

いく作業と並行して進められなければならない。このラテン語動詞 *educere* は、「教育(education)」の原義を「能力を引き出すこと」とする近代教育学最大の神話の核心にある言葉である。しかし本当に *educere* は「能力(*potentia* あるいは *facultas*)」を目的語として取り、生得的・潜在的能力を「引き出す」行為として語られていたのだろうか。このことをラテン語文献に即して確かめてみる価値は十分にある。その成果をもとに本研究は、「能力を引き出す」ことを「教育(education)」の原義としてきた教育言説の脱構築をも目指すものである。

周知のようにラテン語動詞は法、相、時制ごとに人称変化し、さらに形容詞様の変化をする分詞類が存在するという、複雑な活用体系を有し、ラテン語電子コーパスを用いたとしても、*educare* と *educere* というわずか二つの動詞の用例を網羅し、識別・整理していくことさえ、相当の手間と困難が予想される。試みに *educ-* ではじまる語をドイツ・トイブナー古典叢書の電子版を簡易検索してみると、約1,300件を上回る用例がヒットする。この件数は、例えば *educatio* の用例が69件に過ぎないことと比較しても、圧倒的に多いことは一目瞭然である。これまで電子コーパスを活用したラテン語語彙分析を手がけた経験からすると、これらすべての用例を総点検していただくだけでも数年がかりになることは必至である。それゆえ、まずは時代や著者ごとに分類し、用例が頻出するような作品ごとに整理をおこなっていく方針を立てる必要がある。研究期間内に、少なくとも *educare* に関する代表的用例を300~500件程度ピックアップし、ラテン語用例データベースとして整理することをめざし、古典ラテン語における教育関連語彙の布置に関する見取り図を得ることを目標とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究方法の概要

本研究は三つの作業を中心に進められた。  
 作業 : ラテン語電子コーパスの活用によって、ラテン語動詞 *educare* 及び *educere* の用例を網羅的に検索し、著者名、作品名といった基礎情報とともに整理した。  
 作業 : 電子的に得られた検索結果をもとに、*educare* 及び *educere* が頻出する作品を選定し、文献調査による裏づけをとることにした。その際、翻訳等により文脈を把握しやすい形で整理することを心がけた。  
 作業 及び の作業によって得られた結果をデータベースとして取りまとめ、*educare* の用例の特徴について考察した。  
 ・*educare* に関して、その動作主は誰なのか、また対象は何なのかを明らかにした上で、それはそもそもいかなる行為と解しうるのが、考察した。  
 ・*educere* に関して、その対象は何なのかを明らかにし、「能力(*potentia* や *facultas*)」を

引き出すと表現され得たのかについて検証することにした。

## (2) 具体的作業方法

作業 : まず、Bibliotheca Teubneriana Latina (BTL online 版) を利用し、educare と educere に関する用例を検索し、著者名、作品名ごとの出現傾向を数量化して把握した。すでに簡易な予備的検索によって、educare ではじまる用例は、1390 件(educatio:69 件)にのぼることが判明しており、研究協力者の支援を受けて、データの整理を行った。このデータベース構築の基本作業は、educare の活用形ごとに逐一検索していくという手間のかかる方法で進められ、得られた膨大なデータを著者名、作品名、該当箇所、用例ごとに入力し整理するという根気のいる作業によって遂行された。

次に、こうして得られた活用形本位の基本データベースを著者名、作品名ごとに整理し直す作業に従事した。そこから educare の用例が頻出する作品を抽出し、実物による確認作業を実施する作業 に備えた。

作業 : 作業 で得られたデータをもとに、educare の用例が見つかった該当箇所を文献調査によって確認することにした。これまで電子コーパス研究を進めてきた経験では、この作業は、ラテン語構文を理解し、文意を翻訳等の形で把握していくわけであるが、かなりの時間と労力を費やすことが予め想定されていた。さしあたり、作業 によって抽出された基礎データをもとに、年間 100 件程度の用例の確認を目ざすことにした。その際、educare と educere の活用形が同一の用例については、特に注意を払い、構文、文脈に即して、いずれの動詞であるのか識別するよう務めた。

・学内図書館所蔵のものについては、即座に文献との対照による裏づけ作業を行った。

・国内図書館所蔵のものについては、ILL(図書館間相互利用サービス) を利用し、場合によっては現地図書館に赴き、閲覧・複写を行った。

・海外図書館所蔵のものについては、海外文献調査に備え蔵書確認し、リスト・アップしておき、海外図書館での閲覧及び入手作業を進めた。

作業 : 作業 及び作業 によって得られた検討結果を用例ごとに入力整理し、まずは educare に関して用例を網羅的に一覧できるデータベースを作成した。educare については、動作主及び対象の特定・属性の整理。行為の性格を特徴づけ、文意の把握が容易になった。educere については、動作の対象を特定し、「能力(potentia、 facultas)」を目的語とするのか否かを確認する際の目安となり、educare との相違を明確にし、行為の性格を特徴づけることが可能になった。

## 4. 研究成果

### (1) 数量的把握

本研究作業の限りにおいて、educare の総用例数は 593 件にのぼった。そもそも educare に関して、これだけの用例数を網羅的に収集し、一覧できるようになったことは、本邦のみならず、世界的にみた場合でも類例がなく、教育学研究にとって画期的なことであると自負している。ただし、educere と同一の 12 の活用形に関して、そのすべてを識別する作業を完了することは、今後の課題として残された。しかし、一部混在しているとはいえ、用例の頻度、分布に関して、おおよその趨勢を知ることができる。

educare の活用形ごとの用例頻度  
比較的用例数が多かった活用形について、用例数を示せば、次の表の通りとなる。

educio	17	educatus	115
educat	105	educati	35
educant	25	educatum	31
educavi	13	educatos	13
educavit	23	educate	17
educet	33	educatam	9
educent	7	educandis	49
educatur	11	educandos	7
educantur	9	educandum	7

\*ただし、次の educio (直・現・能・一単どうし) educas (直・現・能・二単=接・現・能・二単) educat (直・現・能・三単=接・現・能・三単) educamus (直・現・能・一複=接・現・能・一複) educatis (直・現・能・二複=接・現・能・二複) educant (直・現・能・三複=接・現・能・三複) educor (直・現・受・一単どうし) educaris (直・現・受・二単=接・現・受・二単) educator (直・現・受・三単=接・現・受・三単) educamur (直・現・受・一複=接・現・受・一複) educamini (直・現・受・二複=接・現・受・二複) educantur (直・現・受・三複=接・現・受・三複) については、educare と educere の活用の形が同一である。

当然とはいえ、分詞の形で頻出することは一目瞭然である。それ以外では、直説法・現在の能動態及び受動態では相当の用例が確認できるし、直説法・完了・能動態・一人称単数の educavi が 13 件、同三人称の educavit が 23 件、それから接続法・現在・能動態・三人称単数の educet が 33 件にのぼることは注目される。

著者別にみる educare の用例頻度  
次に、活用形ごとに整理された用例データ

を著者順、作品順に並べ替えることによって得られた知見として、educare の著者別の用例頻度をあげておく。擬（偽）作者を区別すれば、108 人の著者が educare を用いたことになる（著者不明の用例も 49 件確認されている）。

オウィディウス	8
プラウトゥス	8
クインティリアヌス	8
タキトゥス	8
ワロー	9
ラクタンティウス	11
大セネカ	11
A・マルケリヌス	12
M・ウィクトリヌス	12
大プリニウス	19
リウィウス	20
小セネカ	21
キケロ	31
ボンフィニス	32
コルメツラ	37
N・マルケッルス	44

本表には現れなかったが、このほかにもウエルギリウス（3 件）、ドナトゥス（3 件）、エウテュケス（4 件）など目を惹く著述家も含まれていた。

これら著者別用例頻度から指摘されなければならない顕著な特徴は二点ある。まず一つ目は、educare はラテン語文法書のなかで最も頻繁に言及されていたという点である。このことは次節で述べるように、educere や alere との区別を古典ラテン語の用例に即して議論したものである。本表の中で、最も用例数の多いノニウス・マルケッルスの場合、そのすべての用例が『学説集 (De compendiosa doctorina)』と題されたラテン語文法書に登場している。古代末に廃れゆく古典ラテン語の語法を後世に伝えるべく著されたラテン語文法書において、educare はよく議論される言葉であったわけである。

次に指摘しておきたいのは、コルメツラ『農業論』や大プリニウス『博物誌』、ワロー『農業論』に見られるように、educare は人間の子どもを養育のみならず、動物（特に家畜）の成長という文脈でも用いられたという事実である。キケロがその『善と悪の究極について』で述べているように、「大地が育むもの（植物）」にさえ educatio が認められていたことが想起される。educare もまた、生(anima)を宿すものすべてに対して用いる

ことができたと考えられる。

## (2) ラテン語文法書における用例

ラテン語文法書において educare が頻繁に議論されていたことは、すでに確認しておいた通りであるが、ここでは実際の用例について明らかになった点を紹介しておく。以下、古代末に著されたノニウス・マルケッルスの『学説集』とエウテュケスの『動詞論』における educare の用例と語釈について、三点に絞って研究成果を陳述しておく。

まず確認されてよいことは、古代末の 4 世紀から 6 世紀にかけて、古典ラテン語を分析し直し、文法書として記録し、継承しようという一連の著作のなかに、educare についての説明が明示的に含まれていたという点は強調しておくべきである。中世の学徒の便宜をはかったこれらの文法書が、educare の語釈の上で果たした役割は少なくない。その際、いずれの文法書も educare と educere を比較対照することで両者の違いを説明している点も力説されて然るべきである。古代末の時点で、少なくとも文法学者たちは educare と educere の語義と用法を区別していたのである。19 世紀後半に刊行された Lewis & Short の *A Latin Dictionary* には educare と educere は厳密に区別されるわけではないと注記があるが、そうではなかったのである。むしろ古代末のノニウス・マルケッルスやエウテュケスにとって、educare は「(栄養を与え) 養う」ことであり、それに対し educere は「外に連れ出す」ことであり、基本的にはそれぞれ区別されるべき別々の動詞であると認識されていたわけである。

第二に確認すべきことは、educare の具体的用例についてである。ノニウス・マルケッルス『学説集』は、educare の典型的な用例としてワローの「カトー、あるいは子どもの養育について」を挙げていた。人口に膾炙した 'educit obsterix、educat nutrix' の典拠は、今は散佚したワローの大カトーに関する評伝であった。さらにノニウス・マルケッルスは alere と educare の違いについて論じており、alere が一時的に食を与えることであり、educare は継続的に満足させるべく養うことであると述べていた。この違いを例証するにあたり、プラウトゥスの喜劇『メナエクス兄弟』とアッキウスの悲劇『アンドロメダ』の一節を引いていた。そのいずれもが、男の educare を証言する用例であった点は興味深い。

またエウテュケスの『動詞論』では、ラテン文学の最高峰とされるウエルギリウスの『アエネーイス』が引用されていたことは特筆に値する。これまで教育学研究の立場から、この事実に言及しえているものを寡聞にして知らない。『アエネーイス』に educare の用例が存在したことは、ルネサンス期の古典の再発見を契機とした、ラテン語 educatio への関心の高まりとも関係がある可能性を

示唆するものである。もちろんそのことは、あらためて近代初期における各国語への *educatio* の受容史の解明をまっけて検討する必要がある。

最後に、ノニウス・マルケッルスが述べていたように、*educare* が一時的なものではなく、継続的に 生 を養うという語義を有するものであってみれば、それは生きるにあたって恩情関係(親 - 子関係、主人 - 食客関係、師 - 弟子関係)を結ぶものと理解されていたことが明らかになってきた。実際、『メナエクス兄弟』の食客は、わざわざ *educare* の放つ魅力に引き寄せられ、わざわざ自ら縛られるために主を訪ね、食いっぱぐれた腹いせに主人に罵声を浴びせかけることになる。『アンドロメダ』では、父王ケーペウスが育ててもらった恩を返せと愛娘アンドロメダを説得し、その甲斐もむなしくペルセウスに連れ去られるくたりに用いられている。そして何より、『アエネーイス』のウーフェンスの育てた若者たちは、パラスの死への報復のために惨殺され、灰燼に帰せられる。*educare* が 生 を養う営みであってみれば、当然、*educare* に対する恩義が裏切られたときの絶望や憎悪も大きいのである。

そのことを知りぬいていたのであろう。小セネカは『マルキアに寄せる慰めの書』のなかで、「あなたは *educatio* そのものからあなたの労苦に対する十分に大きな報酬を得ている」と述べるにいたる。*educatio* の労苦それ自体が *educatio* の喜び(*fructus*)であり、すでに報われている。息子に先立たれた母親を慰めるのは、*educare* の記憶そのものだということになる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

白水 浩信、「ラテン語文法書における *educare* の語釈と用例—ノニウス・マルケッルス『学説集』とエウテュケス『動詞論』を中心に」(査読なし)『北海道大学大学院教育学研究院紀要』、第 126 巻、139 - 155 頁、2016 年 6 月(印刷中)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

白水 浩信(SHIROZU, Hironobu)

北海道大学・大学院教育学研究院・准教授

研究者番号：90322198